

## 特 集

# 多元文化世界としての 中・東欧におけるドイツ語文学

### はじめに

本特集は、中・東欧を多民族、多言語、多文化の混住する地として捉え、そこで展開されたドイツ語文学の諸相を呈示する試みである。

もとより、民族や言語あるいはその言語に基づく文化なるものは、自明の存在ではない。しかし中・東欧では、とりわけ19世紀以降、民族や言語こそが社会集団をまとめる上でもっとも根本的な条件であるとの信念のもとに、その実体化を目差す取り組みがさまざまに行われ、それらの活動がこの地域の政治的社会的体制を規定していった。自らをそのようなものとして定立しようとする諸民族や諸言語、そしてそこに拠って立つ諸文化がせめぎ合いつつも密接に関連しあっているという意味で、本特集では中・東欧を「多元文化世界」と呼ぶ。この壮絶かつ密な関係のただなかで改めて、ドイツ語で書くという行為を捉え、見つめ直すことが、本特集の趣旨である。

\*

歴史的にみれば、言語一般の例に洩れず、「ドイツ語圏」とされる地域もまた、政治的変動に伴い、その境界線を移動させてきた。だが、政治的理由から、時に苛酷なまでに強引に境界線が引き直されようとも、そこに住む人々が自らの母語や文化を手放すことは容易ではない。政治的境界線と言語や文化の分布との一致は、所詮、想像の域を出ない現象なのである。

第一次世界大戦以前、ハプスブルク帝国領やドイツ帝国領の東部境界線に至る諸地域では、ドイツ語が公用語とされていた。しかしこれらの地域では、圧倒的に多くの住民がポーランド語やウクライナ語、チェコ語、スロヴァキア語、ハンガリー語、ルーマニア語、イディッシュ語等を母語とし、各々の母語に基づく文化を保持し、その振興に努めていた。母語による文化の保持と振興はまた、ナショナリズムを支える柱でもあった。例えば、19世紀のチェコやウクライナでは国民国家の建設を目差す前段階として、母語を文語として体系化し、それをを用いた文学活動を通して、民族としてのアイデンティティ形成を図ろうと試みた。ルーマニアでは、民族の起源としてのラテン性を重視する立場から、19世紀半ばに言語

表記がキリル文字からラテン文字に切り替えられる。せめぎ合う多民族、多言語の社会を背景に、ドイツ語を母語とするドイツ系あるいはユダヤ系住民もまた、ウィーンやベルリンといったドイツ語文化の中心地に目を配る一方、出身地の社会的文化的土壌を意識した文学営為を展開していった。彼らと隣人である他民族やその文化との関係は非常に輻輳したものであり、その関係は、故郷ガリツィアを描いたレオポルト・ザッハー＝マゾッホ（1836-1895）やカール・エーミール・フランツォース（1848-1904）、ブラハ出身のマックス・ブロート（1884-1968）等の作品に独特の刻印を与えた。これらの作品では民族間はもとより、社会階層間やジェンダー間に至るまで、さまざまなレベルで、優越感とその裏返しのエキゾチズム、それに対する反発、脱出への憧憬、自己存在への確信あるいは絶望といった多様なニュアンスの籠もった視線が交錯している。

その後、第一次世界大戦敗戦を契機に両帝国は解体あるいは体制転換を迫られ、領土は再編される。東部地域では民族自決主義に基づき多くの国が建国され、既存国家の境界線も変更された。そして、国家の境界線と民族分布、さらに言語や文化の境界線との一致という国民国家の理想像を目差した政策が実施される。

例えばルーマニアは、トランシルヴァニア、ブコヴィナ、東部バナート、ベッサラビア等の諸地域を獲得し、戦前の旧王国領を倍以上拡大した。だが同時にルーマニアは、国内に多数の非ルーマニア系住民を抱え込んだ。1930年の国勢調査でも非ルーマニア系住民は全人口の約29.2%を占め、トランシルヴァニアのみを見れば、約42.2%にのぼる<sup>1)</sup>。新たに獲得された地域では、ルーマニア化政策が推進された。農地改革により耕地面積におけるルーマニア人所有者の割合が大幅に増加し、ルーマニア人は経済的影響力を増す。それに加え、公的機関での使用言語はルーマニア語とされ、全公務員に対してルーマニア語の習得が求められた。小学校でのルーマニア語習得も義務づけられ、非ルーマニア語を授業言語とする学校は大幅に削減された。その中で非ルーマニア系住民たちは、自らのアイデンティティを保持すべく、むしろ活発に母語での文学営為を展開していく。この時期、ルーマニア領内諸居留地のドイツ系およびドイツ語ドイツ文化に同化したユダヤ系住民たちは、ルター派、カトリック、ユダヤ教という宗派・宗教の相違や人種の相違を超え、ドイツ語ドイツ文化を中核に据えた連帯を本格的に模索し始める。しかしこの新たな連帯の萌芽は、「本国」ドイツで台頭したナチズムが野火のように東方の「民族同胞」居留地に広がることで、たちまち摘み取られた。トランシルヴァニアのドイツ系住民、いわゆるジーベンビュルガー・ザクセン人たちは積極的にアンソロジーの編集に携わり、文学を通してドイツ系住民の結束を固めようとする一方、東方における前哨としての自分たちの存在を「本国」の「同胞」に認知してもらおうと努めた。一方、ブコヴィナでは、ユダヤ系詩人たちを中心に高い水準の詩作活動が行われる。彼らはドイツ語文化の正統な担い手としての矜持を保ち、反ユダヤ主義に抗するように、相次いで詩集を出版する。こ

の時期、ルーマニアのドイツ語話者居留地の文学はそれぞれに、ルーマニア化の圧力を受けつつドイツやオーストリアへ熱い眼差しを向けながら、相異なる道を辿っていくのである。

ところで、現在のドイツ連邦共和国においても、多民族性や多文化性は非常にアクチュアルな問題である。多くの場合それは、外国人労働者や移民受け入れ国としてのドイツの現状を念頭において語られている。しかしこの地域においても、実際には第二次世界大戦以前から、また戦後の分断時代においても、多民族性や多文化性は厳然と存在していた。例えば、エルベ川ならびにザーレ川とオーダー川に挟まれた地域にはヴェンデン人と呼ばれるスラブ系諸部族が定住しており、独自の言語と文化の保持に努めつつ、現在に至るまで千年以上もの歴史を持っている。彼らや、さらにシンティ/ロマ、ユダヤ人といった人々の姿やその文化もまた、この地の自然や風景とともに、ドイツ語による作品中に描き込まれた。ペーター・フーヘル（1903-1981）の詩作品は、その一例である。

また、東欧革命とドイツ統一、他方でのヨーロッパ統合という社会の根本的構造転換は、ドイツ語圏における多民族性や多文化性をめぐる議論に、新たな局面を拓いた。変化の一つは、東西冷戦構造の終結とともに、改めて中欧という地域概念が注目され、多民族国家としてのハプスブルク帝国の歴史が政治的アクチュアリティを獲得したことである。それと並行して、旧ハプスブルク帝室直轄領ブコヴィナ出身のユダヤ系詩人たちについても、出身地の歴史や文化的風土といった共通性を踏まえて評価が行われるようになる。加えて、もう一つの重大な変化を、東欧からの帰還移住者と彼らの文学をめぐる問題に見ることができる。東欧革命の直後、連邦共和国政府は血統主義的立場から、ロシアやルーマニア、ポーランド等の東欧諸国に在住していた多数のドイツ系住民にドイツ国籍を付与し、彼らはこぞって連邦共和国へ移住した。これら、いわゆる帰還移住者たちは、血統的にはドイツ人とされるが、彼らの出身居留地のなかには12世紀以来の古い歴史を持つものもある。数世紀に渡って言語島に暮らすなかで、居留先の国が公用語とする言語やその言語文化に同化していた者も非常に多い。血統的にはドイツ人とされながらも、異文化を背負った人々や彼らの文学・文化営為を、どのように社会に「統合」していくかという問題は、ドイツ語による文学という営み自体のあり方や社会の多文化化への立場にも大きく関わっている。

なお、チェコ出身のユダヤ系作家レンカ・ライネロヴァー（1916-）の場合はさらに複雑で、テキストの「原語」がドイツ語とチェコ語の間で浮遊しており、必ずしも明確に定まらない。彼女の波乱に満ちた半生はユダヤ、ドイツ、チェコといったアイデンティティの多層性に彩られている。ドイツ語作家でもチェコ語作家でもある彼女の人生と文学もまた、多元文化世界としての中・東欧におけるドイツ語文学の一断面を示しているといえよう。

\*

以上、駆け足で見てきたように、中・東欧の多元文化世界のなかでドイツ語詩人や作家たちは、他の言語や文化からの影響を、ときには積極的にとりこみ、ときにはそれらに意識的に背を向け、さまざまな仕方でも自らのことばに紡ぎこんでいった。本特集を通して、なによりもまず、ドイツ語で書くという行為が、ドイツ語を母語とする人々のみにより構成された同質の社会のなかで行われる営みでは必ずしもないという事実を改めて確認したい。同時にそこから、ドイツ語による文学や文化営為に内在する「越境する力」も見えてくる。他の文化との関係を背負って生み出されたことばは、さまざまな立場の人々に発信され、受容されることにより、政治的に引かれた国家や民族という境界線を越えていくことも可能なのだ。ただし、その試みの根底には、ときに、ドイツ語ドイツ文化に対する優越性への確信が潜在し、言語ナショナリズムあるいは文化ナショナリズムという形での新たな境界線を生み出す可能性も秘められている。その意味で、中・東欧におけるドイツ語ドイツ文化をめぐる議論は、ドイツ語文化圏における真の意味での多元文化主義存立にとって一つの試金石となりうるのである。

多元文化世界としての中・東欧という視座を設定するにあたり、上記のような問題意識から、本特集はなによりもまず自戒をこめて、言語ナショナリズムあるいは文化ナショナリズムに対する批判的問題意識を出発点におく。また、多民族、多言語、多文化の混住という現象に関してしばしば見られるように、その状況を美化し、安易にそれらの「共生」「共存」を謳って事足りれりとする姿勢からも距離をとる。本特集が目差すのは、多民族、多言語、多文化の混住を背景に、ドイツ語で書くという行為がどのような意味を持ち得たのかを具体的に呈示し、それを通して中・東欧という地域に根ざしたドイツ語文学の特性の一端を明らかにすることである。「ドイツ文学(deutsche Literatur)」という用語を、領土的、民族的ニュアンスから改めて解き放ち、〈ドイツ語による文学〉という本来の意味で捉え直すことにより、そこに内在する多元文化性を再認識したい。

(藤田 恭子)

### 【注】

- 1) Institutul central de statistică: *Anuarul statistic al României 1937 și 1938*, S. 58-61 sowie Șandru, Dumitru: *Populația rurală a României între cele două războaie mondiale*, S. 52. Zitiert nach: Livezeanu, Irina: *Cultural Politics in Greater Romania. Regionalism, Nation Building & Ethnic Struggle, 1918-1930*, Ithaca; London (Cornell Univ. Press) 1995, S. 10.